

日語否定漢語前綴詞素「不・無・非・未」 —與外來語詞根結合之派生詞為主—

林慧君*

摘要

日語表示否定概念的漢語前綴詞素有「不-」「無-」「非-」「未-」等，先行研究對此四個類義詞素的相關研究，大都以這些否定漢語前綴詞素與漢語・和語詞根所結合的派生詞（例如「不手際」「無神經」「非公開」「未完成」等）為分析之對象。然而，近來日語外來語在日語裡不僅僅只是單純的借用外來語，進而在日語的構詞裡不斷發揮其造詞功能，例如「非ミステリー」「無ダイヤ」「未チャレンジ」等否定漢語前綴詞素與外來語詞根所結合之語例也不少。

本論文即以此四個否定漢語前綴詞素與外來語詞根結合之派生詞為研究考察之對象，從否定漢語前綴詞素所結合之外來語詞根的品詞性、否定內容的範圍、以及前綴詞素的否定意義功能之三個觀點來探討。並和傳統的[不・無・非・未＋漢語・和語詞根]派生詞相對比，分析二者究竟有何相似及相異之處，以闡明[不・無・非・未＋外來語詞根]派生詞的構詞特徵。最後，並論述在肯定否定的對立概念量尺上，[不・無・非・未＋外來語詞根]派生詞與傳統的[不・無・非・未＋漢語・和語詞根]派生詞之間本質的差異性。

關鍵詞：否定概念、漢語前綴詞素、外來語詞根、派生詞



臺灣大學學術
期刊資料庫

* 台灣大學日本語文學系教授

An Analysis of Japanese Negative Kango Prefixes: "FU-", "MU-", "HI-" and "MI-": With a Focus on Gairaigo Derivatives

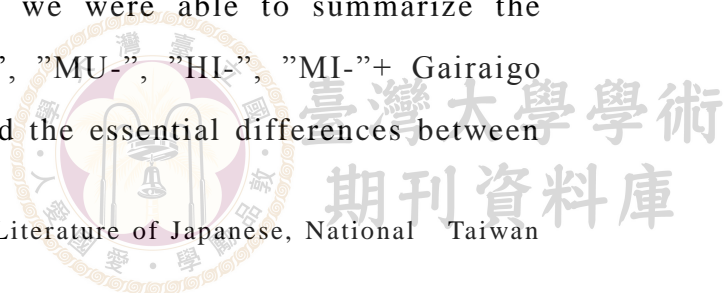
Lin, Hui-jun *

Abstract

"FU-", "MU-", "HI-", "MI-" are all Japanese Kango Prefixes showing negative meanings. Prior researches on the for prefixes mostly focus on their Kango and Wago derivatives. For examples, "FUTEGIWA", "MUSHINKEI", "HIKOUKAI", "MIKANSEI"..etc. However, we found that in recent years, Gairaigo are not only borrowed words from foreign languages, but also have word-forming abilities to create new vocabularies. Such as "HIMISUTERII", "MUDAIYA", "MICHARANGI" are all derivatives with combinations of negative Kango prefixes and Gairaigo roots.

The purpose of this article is to analyze the derivatives with combinations of the four negative Kango prefixes and Gairaigo roots. The analysis was made from three prospects: The word classes of the Gairaigo roots, ranges where the negative prefixes cover, functions of the negative prefixes. Furthermore, we took those derivatives to compare with the traditional derivatives with the combinations of "FU-", "MU-", "HI-", "MI-" + Kango or Wago roots, in order to find out the similarities and differences between the two sets of derivatives. Through the comparison processes, we were able to summarize the word-forming features of the "FU-", "MU-", "HI-", "MI-" + Gairaigo roots. At the end, we also indicated the essential differences between

* Professor, Department of Language and Literature of Japanese, National Taiwan University



the derivatives of the “FU-”, ”MU-”, ”HI-”, ”MI-”+ Gairaigo roots and the traditional “FU-”, ”MU-”, ”HI-”, ”MI-”+Kango or Wago roots on the base of positive-negative spectrums.

Keywords : negative meanings, Kango prefix, Gairaigo roots, deriveatives



臺灣大學學術
期刊資料庫

日本語の否定漢語接頭辞「不・無・非・未」 —外来語語基との結合を中心に—

林慧君*

要旨

日本語には否定の概念を表す一群の漢語接頭辞「不-」「無-」「非-」「未-」などが挙げられる。従来この四つの類義否定接頭辞に関する考察は少なからずあるが、それはこれらが固有の漢語・和語語基と結合する派生語についての分析ばかりである。が、外来語がかなり日本人の言語生活に浸透している現代においては、「非ミステリー」や「無ダイヤ」「未チャレンジ」などのような、否定漢語接頭辞と外来語語基との結合例もよく見かけられるようになった。

従って、本稿では否定漢語接頭辞が外来語語基と結合する混種語の派生語だけを分析の対象とし、その外来語語基の品詞性、派生語における否定のスコープ、また否定漢語接頭辞の機能と三つの観点から考察を行う。そして、従来の[不・無・非・未+漢語・和語語基]派生語と比べ、両者における類似点と相違点を分析するのを通して、[不・無・非・未+外来語語基]派生語の語構成的特徴を明らかにしたい。最後に、肯定否定の対立概念のスケールにおいては、[不・無・非・未+外来語語基]派生語と従来の[不・無・非・未+漢語・和語語基]派生語における肯定否定概念の本質的な相違点も論じる。

キーワード：否定概念、漢語接頭辞、外来語語基、派生語



臺灣大學學術
期刊資料庫

* 台湾大学日本語文学科教授

日本語の否定漢語接頭辞「不・無・非・未」 — 外来語語基との結合を中心に —

林慧君

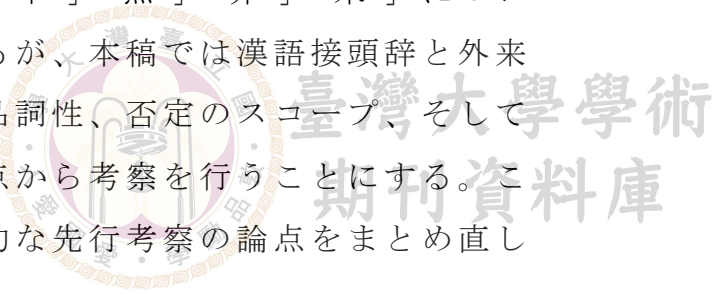
一、はじめに

日本語には否定の概念を表す一群の漢語接頭辞「不-」「無-」「非-」「未-」などが挙げられるが、これらは否定の意味を添えることで共通している類義接頭辞と見られる。従来この四つの否定接頭辞に関する考察は少なからずあるが、それはこれらが固有の漢語・和語語基と結合する派生語についての分析ばかりである。が、外来語がかなり日本人の言語生活に浸透している現代においては、「非ミステリー」や「無ダイヤ」「未チャレンジ」などのような、否定接頭辞と外来語語基との結合例もよく見かけられるようになった。

従って、本稿では、否定漢語接頭辞が外来語語基と結合する混種語の派生語だけを分析の対象とする。否定の概念を表わす漢語接頭辞が外来語と結合するに当たり、果たして従来の漢語・和語との結合と同じような造語現象を示すのか、もしくは何か類似または相違する点があるのか、つまり、否定漢語接頭辞と外来語語基が結合する派生語における造語特徴などを、従来の否定漢語接頭辞と漢語・和語語基との結合との対比を通じて解明するのが本稿の主旨である。

二、先行研究について

否定の意味を表わす漢語接頭辞「不-」「無-」「非-」「未-」については、数多くの先行研究が見られるが、本稿では漢語接頭辞と外来語語基との結合に関して、語基の品詞性、否定のスコop、そして否定漢語接頭辞の働きと三つの観点から考察を行うことにする。ここではこの三つの観点による代表的な先行考察の論点をまとめ直し



て概観しよう。

まず、否定の漢語接頭辞と結合する語基の品詞性について、サトー・川崎・ソーニア（1982）と奥野（1985）が代表的に挙げられるが、主な論点としては、「無-」と結合する漢語・和語語基は名詞類（体言性）が断然に多いのに対し、「未-」と結合するのは動詞類が圧倒的だと言う。そして、「非-」「不-」は動詞類、名詞類、形容動詞、形容詞類（用言性と体言性）とも結合するが、「非-」には一番多く結合するのは名詞類に対し、「不-」には動詞類だと述べられている¹。

次に、否定漢語接頭辞の否定のスコープに関しては、野村（1973、1978）、サトー・川崎・ソーニア（1982）と奥野（1985）、吉村（1990）が見られるが、大体として「不-」と「無-」は「不+渡り手形」「無+政府主義」ではなく、「不渡り+手形」「無政府+主義」の如く、その直後の最小単位の語基しかスコープしない。一方、「非」はやや複雑であり、否定のスコープがその直後の最小単位でなくてもいいと言う。例えば、「非衛生化」「非暴力手段」の場合は、「非衛星+化」または「非+衛星化」、「非暴力+手段」または「非+暴力手段」とも考えられる如く、「非-」がその直後の最小単位語基（「衛星」、「同盟」）だけをスコープし、またはその後の派生語語基全体（「衛星化」）か複合語基全体（「同盟主義」）をスコープする、と二通りの分析が認められる。但し、「非～的」という語構造をもつ場合は、「非+論理的」「非+人道的」「非+衛生的」などのように「非-」がその後の派生語語基を否定のスコープとする、と指摘されている²。

それから、否定漢語接頭辞の働きに関する詳しい先行論述として主に相原（1986）が挙げられるが、相原（1986）では「不-」「無-」「非-」「未-」の、接頭辞としての働きについて〈存在性の否定〉〈行為性の否定〉〈事態性の否定〉〈価値性の否定〉〈概念性の否定〉と五つ分類されている。

¹ サトー・川崎・ソーニア（1982）3～5頁及び奥野（1985）89頁と91頁を参照。

² 野村（1973）36頁、野村（1978）129頁、サトー・川崎・ソーニア（1982）7頁、そして奥野（1985）89頁、91頁と吉村（1990）40～41頁を参照。

〈存在性の否定〉とは、接頭辞に結合する語基の表している事象そのものが存在しないということであり、例えば「無感覚」「無試験入学」などのように、「無-」という接頭辞によって作り上げられた派生語が圧倒的に多いと言う。

〈行為性の否定〉とは、その接辞の結合語基の示す行為や動作が行われないう意味であり、「不干涉」「無制限」「非公開」「未開発」などの如く、「不-」「無-」「非-」「未-」四つの接頭辞がいずれもこの〈行為性の否定〉の機能を表すことができるが、特に「不-」が多く見られ、そして、「未-」を含む派生語はほとんどこの類だと述べられている。

〈事態性の否定〉とは、結合の語基によって示された状態にない、またはそれと相反する状態にある、という否定の意を添えることである。例えば「不確実」「無所属」「非常勤」などのように、「不-」「無-」「非-」三つの接辞により作り上げられるこの機能を表す派生語が多数見られるが、「未-」と結合するのは少ないと記述されている³。

〈価値性の否定〉というのは、語基そのものの形状が望ましいものではない、価値のある状況にない、というマイナス的な否定の意を添える用法であり、例えば「不機嫌」「無気力」などのように主に「不-」と「無-」によりこの機能が果たされると言われる。

最後に〈概念性の否定〉とは、語基の表す概念を離れた、もしくはその概念に必要な条件を欠いている、といった意味であり、例えば、「非人情」「非常識」などのように、主に「非-」を用いてこの働きをする派生語が作り上げられる、と論じられている。

上記の如く、従来の否定漢語接頭辞「不-」「無-」「非-」「未-」に関する先行研究はいずれも固有語の漢語・和語語基との結合だけについて検討して論述されているものであるが、外来語語基と結合する場合はほとんど言及されていない⁴。というわけで、本稿ではまず、

³ 強いて言えば「未成年」「未然」ぐらい、と相原(1986)に挙げられている。

⁴ サトー・川崎・ソーニア(1982)の最後に「無シード」「非ファッションブル」

これらの否定漢語接頭辞が外来語と結合するのかどうか、また外来語語基と結合する場合、その外来語語基の品詞性や派生語における否定のスコープ、また否定接頭辞の機能は果たして従来の[不・無・非・未+漢語・和語語基]という語構造をもつ派生語と同じなのか、または相違点があるのかなどを明らかにする必要があるように思われる。

三、否定漢語接頭辞と外来語語基との結合についての考察

本節では、否定漢語接頭辞「不-」「無-」「非-」「未-」と外来語語基との結合について、外来語語基の品詞性、派生語における否定のスコープ、そして否定漢語接頭辞の働きという三つの観点から、四つの接頭辞ごとに分析していく。

今回、否定漢語接頭辞「不-」「無-」「非-」「未-」を含む派生語の語例は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)⁵及び『ヨミダス歴史館』⁶から収集する。以下、接頭辞だけをさして言う場合は「不-」「無-」「非-」「未-」、派生語全体をさして言う場合は「不～」「無～」「非～」「未～」と表記するのを断っておく。

(一)「不-」について

「不-」は「不干涉」「不拡大」「不参加」「不許可」「不一致」などのように、漢語とかなり盛んに派生語を作り上げるし、和語とも「不似合い」「不確か」「不身持ち」などのような〈価値性の否定〉を表す語が多く作り上げられていると言う⁷。ところが、今回の、BCCWJ及び『ヨミダス歴史館』の調査では「不-」が外来語と結合する派生語は1例も見付からなかった。つまり、本稿の調査を通して否定漢語接頭辞「不-」は外来語語基とは結合しない、と明らかになった。これは「不-」は動詞類の語基と一番多く結合し、〈行為性の否定〉

が取り上げられ、外来語という語種との結合に関する分析が漢語接頭辞のもっている基底意味などの解明に役立つであろう、と課題として少しふれられている。

⁵ 国立国語研究所のオンラインコーパス。以下「BCCWJ」と称する。

⁶ 読売新聞のオンライン・データベースサービス。

⁷ 相原(1986)71頁を参照。

の機能を果たす派生語を作り上げることとでも関わるように考えられる。

(二)「無-」について

本調査では「無-」と外来語が結合する派生語は、[無+外来語語基]の一次結合が異なり語数 20 例、[無+外来語語基+漢語語基]という二次結合が異なり語数 19 例拾われ、例えば、

「無コスト」「無アクセント」「無メーカー」「無ラベル」

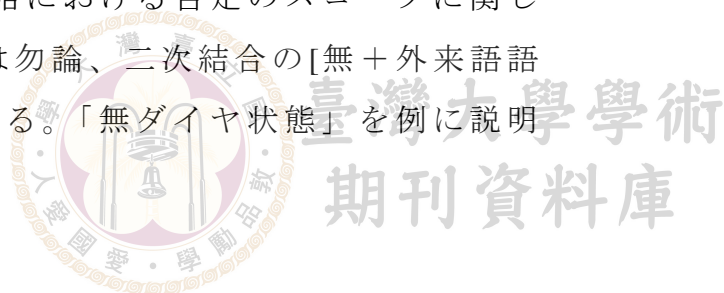
「無センス度」「無セーブ記録」「無ストレス育児」

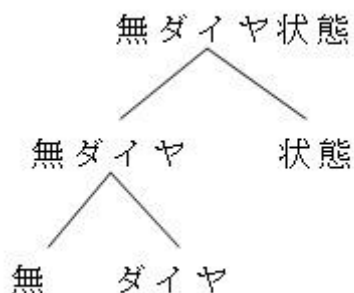
などが見られる。

接辞の結合する語基の品詞性に関しては、吉村(1990)では、諸先行研究で語基の分布に関する調査結果が一致しない原因として分析対象の範囲が異なること以外に、品詞の認定方法が相違するという点も挙げられる、と指摘されている。例で言えば、名詞の場合は、「秩序」のような、動作性を帯びず、動詞用法をもたぬ名詞、そして、「処理(する)」のような動作性を有する名詞も含まれる。造語の性質を論じるに当たり、それらを明確に区別しておく必要があり、故に、本稿では動作性をもたず、名詞だけの用法をもつのを「名詞」と言い、それに対して動作性をもつ名詞の場合は「動名詞」と称し、両者を区別しておくことにした。

本稿の調査結果では、「無-」に結合する外来語語基の品詞性は断然に名詞が多く、例えば「無アクセント」「無コレステロール」「無センス」「無ハンドル」「無ベル」「無メーカー」「無リスク」などが挙げられる。一方、動名詞は、「無アクセス」「無シード」「無トレ」「無サービス(型)」「無セーブ(状態)」「無チェック(状態)」ぐらいだけ拾われた。

「無-」と外来語が結合する派生語における否定のスコープに関して、一次結合の[無+外来語語基]は勿論、二次結合の[無+外来語語基+漢語語基]も分析対象に含まれる。「無ダイヤ状態」を例に説明すると、





の示してあるように、まず「無-」が「ダイヤ」をスコープした後、それに漢語語基「状態」と結合して二次結合の語に作り上げたわけであり、即ち、否定接頭辞「無-」がその直後の最小単位語基だけをスコープするのである。これは、従来の「無-」と漢語・和語語基と結合した派生語(ex. 「[無政府]主義」)と違わない。他に、「無ブレーキ自転車」「無エコ領域」「無ウイルス状態」といった二次結合の派生語も、いずれも「無-」がその後に結合してくる語基全体(ブレーキ自転車」「エコ領域」「ウイルス状態」)を否定するわけではなく、その否定のスコープは直後の最小単位の外来語語基までだけだ、と分析されよう。

次に、「無-」と外来語語基が結合するに当たり、その接頭辞としての働きに関しては、今回の調査を通して〈存在性の否定〉という働きが一番多いと明らかになった。前述したが、〈存在性の否定〉というのは接頭辞に結合する語基の表している事象そのものが存在しない、ということであり、例えば「無ブランド」「無ラベル」などの一次結合も、「無ウイルス状態」「無サービス型」「無ストレス育児」「無セーブ記録」などの二次結合も、「無-」に後接する外来語語基の表す事象またはそのものが存在しないと考えられる。なお、この場合の外来語語基は名詞ばかりである。

また、「無-」と外来語語基が結合する派生語には、「無アクセス」「無サービス」「無セーブ記録」などのような、「無-」の直後に結合してくる外来語語基が動名詞の例も見られるが、派生語全体としてその動名詞語基の表す行為や動作の運動内容が存在しないと捉えら

れよう。言わば、これらは、外来語語基は動名詞ではあるものの、「無-」と結合するに当たり、その動作性が背景化するようになり、主に、行為や動作の運動内容の(名詞的性質の)存在だけが問題とされるのであろう。

(三)「非-」について

本稿の調査を通して「非-」と外来語語基が結合した派生語が最も多く、「非デフォルト」や「非アルファベット」のような[非+外来語語基]の一次結合が異なり語数 89 例、そして「非アルコール飲料」「非アレルギー的要因」といった[非+外来語語基+漢語語基]などの二次以上の結合が異なり語数 418 例収集できた。四つの否定接頭辞の中で「非-」が外来語語基と最も結合しやすく、一番生産性を有する、と明らかになった。

「非-」に後接する外来語語基の品詞性は名詞が最も多く、例えば、
 「非メンバー」「非コンクール」「非ホワイトカラー」
 「非メインバンク」「非エリート」「非ジャーナリズム」
 「非エコノミー」「非ドキュメンタリー」「非ユーザー」
 などがある。

それ以外に「非-」に形容動詞の語基も結合し、

「非アクティブ」「非クラシック」「非ロマンティック」
 「非アーリア的」「非アメリカ的」「非イスラム的」
 「非アレルギー的」「非イデオロギー的」…

などが挙げられ、中に[外来語語基+的]という語構造の形容動詞語基がやや目立って多い。言わば、「非-」は、外来語語基と結合するに当たり、形容詞的な属性的特徴を有する派生語を作り上げることがあるのである⁸。

ところが、今回の調査では「非-」に結合する外来語語基に動名詞のものはあまりないように見受けられた⁹。前にも述べておいたが、

⁸ 野村(1981)にも、「非が不や無とちがい、連体詞にちかい性格をもつ」と述べられている。この「非-」の造語性質は外来語語基との結合においても確認できたと言えよう。

⁹ 動名詞の外来語語基が「非-」と全然結合しないとはいき切れないが、今回の

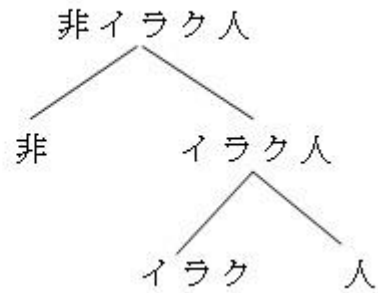
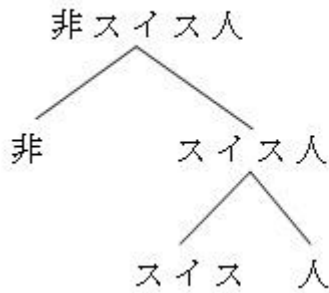
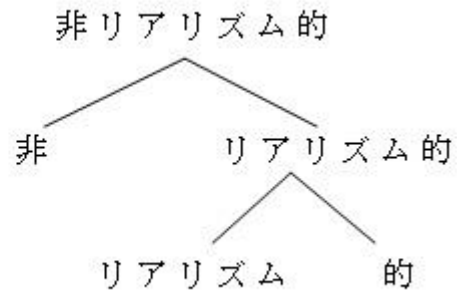
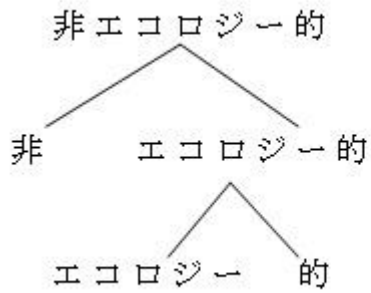
先行研究では「非-」に結合する従来の漢語・和語語基には品詞性の制限は特になく、「非公開」「非武装」「非推薦」「非協力」「非公認」「非課税」などのように動詞(動名詞)のも少なからずあるという。が、本稿の[非+外来語語基]という語構造の派生語に関する調査では、「非-」は動名詞の外来語語基とは殆ど結合しないという点では従来の漢語・和語語基との結合と相違する、と明らかになった。

次に、「非～」派生語における否定のスコープに関して、一次結合の場合は言うまでもなく、その直後の外来語語基をスコープするが、二次結合の場合は、前述した先行研究の、従来の漢語・和語語基との結合と大体同じく、やや複雑に見受けられる。

外来語語基との二次結合の「非～」における否定のスコープはその直後の最小単位でなくともいいわけである。例えば、「非アイドル路線」「非カトリック教徒」などの場合、「非アイドル+路線」または「非+アイドル路線」、「非カトリック+教徒」または「非+カトリック教徒」とも考えられる如く、「非-」がその直後の最小単位の外来語語基だけをスコープし、或いはその後の複合語基全体をスコープする、と二通りの分析が考えられる。

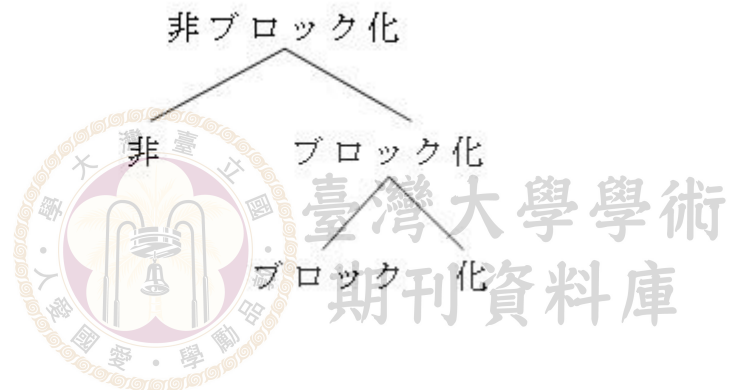
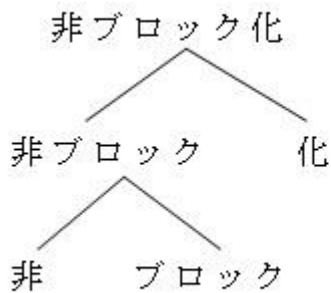
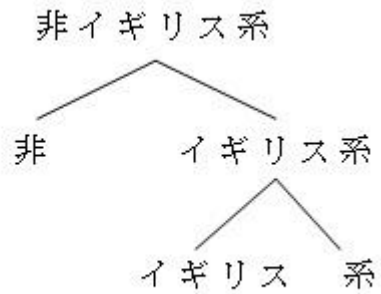
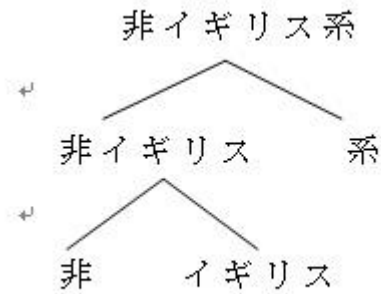
但し、接頭辞「非-」と外来語語基との結合の後に更に接尾辞が結び付く場合は複雑になってくる。まず、その接尾辞が「-的」「-人」の場合は、

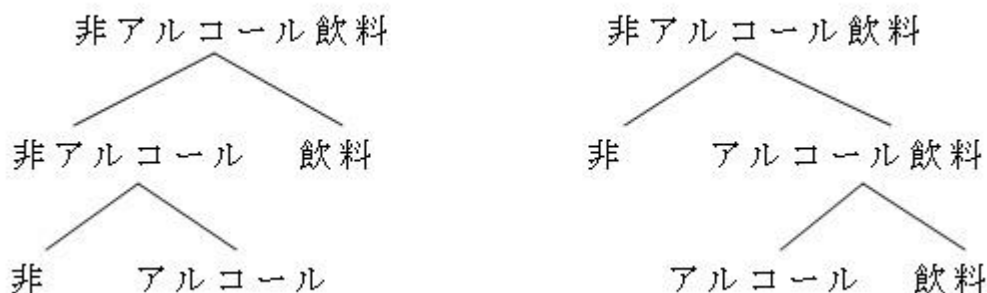
調査では[非+外来語語基]という語構造をもつ一次と二次結合の異なり 507 例の派生語に「非ダイエット」「非ログイン」という、動名詞の外来語語基(「ダイエット」「ログイン」)をもつ派生語が 2 例拾われた。ただ、この派生語は、〈事態性の否定〉という意味機能を表していると考えられ、「ダイエット」「ログイン」の動作性は「非～」派生語においては背景化し、名詞性のほうが前景化している、と見られよう。なお、数からしてこの 2 例はやはり特殊的と言えよう。



などのように、「非-」がその後の派生語語基全体を否定のスコープとする。

一方、「-系」や「-化」などのような接尾辞の場合は、





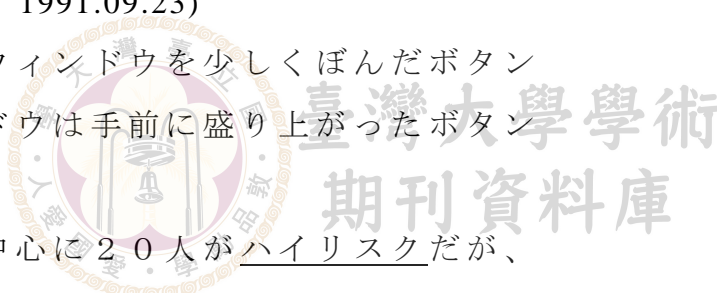
などの示してある如く、否定接頭辞「非-」がその直後の外来語語基のみスコープしたり、その後の派生語全体か複合語基をスコープしたりする、と二通り分析できるのもある。

いずれにせよ、[非+外来語語基]派生語における否定のスコープは、従来の[非+漢語・和語語基]派生語と同じく、その直後の最小単位の外来語語基のみであったり、その直後の外来語語基のみ、またはその後の外来語を含む派生語語基か複合語基であったりするわけであり、様々なスコープ構造を示している。

次に、「非-」と外来語語基が結合するに当たってその接頭辞としての働きに関して、今回の調査では〈事態性の否定〉が最も多く、〈概念性の否定〉がそれに次ぎ二番目多いが、〈行為性の否定〉はない、と観察された。

〈事態性の否定〉というのは、例えば、「非ロマンチック」のように「ロマンチック」と相反する状態にある、といった否定の意味を表すものであり、故に、「非～」と「～」は対立の事態だと捉えられる。今回の実例調査では下の如く、二つの対立語が同時に一つの文脈に出ているのがかなり多数見られ、例えば、

- ① ロシアと非ロシアの拮抗（きっこう）は今後、一層微妙になるに違いない。（『ヨミダス』1991.09.23）
- ② タスクバーはアクティブなウィンドウを少しくぼんだボタンで、非アクティブなウィンドウは手前に盛り上がったボタンで表示する。（「BCCWJ」）
- ③ 成人は35人中、高齢者を中心に20人がハイリスクだが、



14人は基礎疾患がないか、高血圧など非ハイリスクの病気や障害だった。(『ヨミダス』2009.10.17)

などがある。この〈事態性の否定〉という機能は、「非-」と外来語語基との結合ではかなり生産性をもつ、一番典型的だと言えよう。

一方、〈概念性の否定〉も[非+外来語語基]派生語に見られ、例えば、

④ しかし、アラブ諸国との接触の拡大や中東でのイスラム復興の影響を受け、若者を中心に非イスラム的な要素を排除し、戒律厳守など「より純粋なイスラム」を模索する動きが活発化し現在に至っている。(「BCCWJ」)

⑤ 現実から離れようとする意識からか、黒澤は、これ以後、現実そのものを作品のなかで凝視するというより、こうした意識下の形而上的な世界、現実を超えた超リアリズムの世界、非ドキュメンタリーの世界に興味を向けようとする。

(「BCCWJ」)

上の文脈からわかる如く、「非イスラム的」というのは「イスラム的」の対立事態ではなく、「イスラム的」に必要な条件などが欠けており、「非ドキュメンタリー」というのも「ドキュメンタリー」の概念を離れた、即ち(前の文脈に出ている)「リアリズム」の概念だ、と否定の意味が見受けられる。

この〈概念性の否定〉の機能は、[非+外来語語基]の派生語では〈事態性の否定〉に次いで多い意味機能であるが、その語構成的な特徴としては、[非+名詞の外来語語基][非+固有名詞の外来語語基][非+外来語語基+的]と三つの造語パターンがあるようにまとめられる。例えば、

「非エコノミー」「非デフォルト」「非ドキュメンタリー」…

「非ハリウッド」「非ヨーロッパ」「非アメリカ文化」…

「非セックス的」「非アレルギー的要因」…

「非カリスマ的リーダーシップ」…

などである。



ところで、従来「非-」と漢語・和語語基との結合には「非推薦」「非協力」「非課税」などのような〈行為性の否定〉という意味機能を表すのもあるが、本稿の調査では「非-」と外来語語基との結合には〈行為性の否定〉の意味機能を表す派生語は見当たらなかった。これも従来の漢語・和語語基との結合と相違する点であり、「非-」には動名詞の外来語語基が結合しないという語構成的な特徴と関わっているように考えられよう。

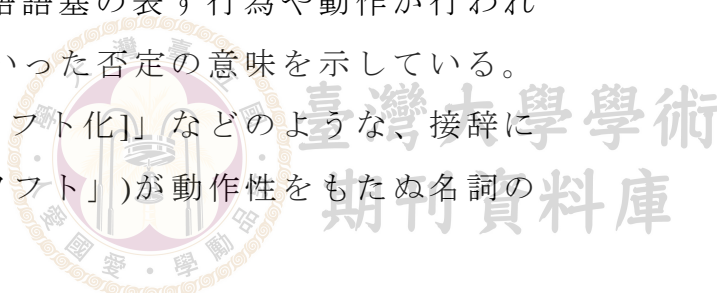
(四)「未-」について

否定接頭辞「未-」と外来語が結合する派生語は本稿の調査ではそれほど多く見当たらず、「未エントリー」「未チェック」「未クリーニング」などの一次結合は異なり語数 12 例だけ、二次結合の例も「未ソフト化」「未アニメ化部分」「未ファイル分」と僅か 3 例だけであった。この調査結果から、「未-」と外来語語基との結合はそれほど生産的ではない、とわかった。

一次結合の「未～」派生語は、その外来語語基が殆ど動名詞であり、二次結合の「未～」派生語も、例えば「未アニメ化」「未ソフト化」の場合、接辞の直後の混種語語基(「アニメ化」「ソフト化」)が動作性をもつ、「-化」接尾辞を含む派生語名詞なのである。言わば、「未-」に後接する語基は動作性が求められるということであろう。これは「未-」の接頭辞としての機能と関わると思われる。

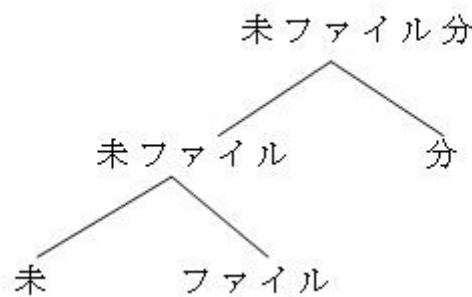
従来、否定接頭辞「未-」と漢語・和語と結合するに当たり、その接頭辞としての働きは〈行為性の否定〉だと指摘されており¹⁰、本稿の調査からも、「未-」と外来語語基が結合する派生語はいずれも〈行為性の否定〉の機能を果たすものであり、従来と変わらないと明らかになった。「未クリーニング」「未チェック」「未リサーチ」などのように、「未-」に後接する外来語語基の表す行為や動作が行われない、または行われていない、といった否定の意味を示している。故に、「未[アニメ化]部分」、「未[ソフト化]」などのような接辞に後接する外来語語基(「アニメ」「ソフト」)が動作性をもたぬ名詞の

¹⁰ 相原(1986)69頁。

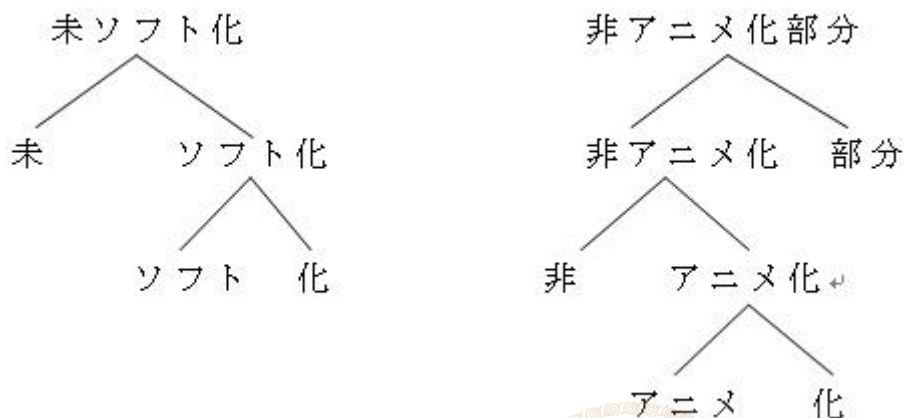


場合だと、その名詞に動作性の機能を持たせる接尾辞 (ex. 「-化」など) と結合させることによってその名詞語基に動作性が付与され、初めて「未」が前接してくるようになるわけであろう。

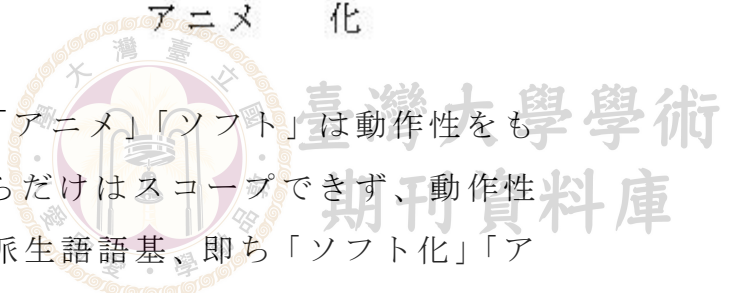
なお、「未-」は、後接してくる動名詞語基に対して否定のスコープをするというのが原則なわけである。故に、一次結合の場合はその直後の動名詞の外来語語基をスコープするが、二次結合の場合は、例えば「未ファイル分」は、



の如く、その直後の外来語語基「ファイル」が動名詞なので、「未-」が「ファイル」だけをスコープして、更に「未ファイル」という混種語に接尾辞「-分」が後接するのである。一方、「未ソフト化」「未アニメ化(部分)」の場合は、



前述した如く、直後の外来語語基「アニメ」「ソフト」は動作性をもたぬ名詞なので、「未-」は、それらだけはスコープできず、動作性を付与させる接尾辞「-化」までの派生語語基、即ち「ソフト化」「ア



ニメ化」をスコープするのである。

四、まとめ

本節では前節の分析内容をまとめるが、その前に、まず否定漢語接頭辞「不-」が外来語語基とは結合しないということについて説明を補足する。

第二節の先行研究では、「不-」に結合する語基は動詞類が一番多く、また、従来〈行為性の否定〉の機能が「不-」「無-」「非-」「未-」四つの接頭辞の中で「不-」により作り上げられた派生語が特に多く見られる、と述べておいた。要するに、「不-」は動詞類の語基と結合して〈行為性の否定〉の機能を果たすのが典型的だと考えられる。ところが、外国語は名詞として日本語の外来語に取り入れられるのが多数であり、動詞としてのものが本来少ないのである。それが故か、「不-」は外来語語基とは結合し難いわけなのであろう。

次に、前節の、否定漢語接頭辞「無-」「非-」「未-」と外来語語基との結合に関する考察の内容について、外来語語基の品詞性、派生語における否定のスコープ、そして否定漢語接頭辞の働きという三つの観点から、従来の[無・非・未+漢語・和語語基]派生語と比較しながら、両者の共通点と相違点を論じてまとめ直そう。

まず、否定接頭辞と結合する外来語語基の品詞性に関しては、「無-」と「未-」が外来語語基と結合するに当たり、「無-」は主に名詞また動名詞少々を、そして「未-」は動名詞ばかりを、結合相手に求めるという考察結果であるが、これは、従来の[無・未+漢語・和語語基]派生語と変わらない。一方、「非-」には名詞と形容動詞の外来語語基は後接するが、動名詞は後接しない。この、「非-」に後接する外来語語基に動名詞はないという点が、従来の[非+漢語・和語語基]派生語と相違するのである。

次に、[無・非・未+外来語語基]派生語における否定のスコープに関しても、調査結果により、従来の[無・非・未+漢語・和語語基]派生語と違わない、と明らかになった。

「無-」はその直後の外来語語基を否定のスコープとする。「非-」は、その否定のスコープは、その否定接頭辞直後の最小単位の外来語語基のみであったり、その直後の外来語語基のみ、またはその後の外来語を含む派生語語基か複合語基であったりするるのである。そして、「未-」は、動作性を有する外来語語基を要求してスコープするわけなので、結合する外来語語基が名詞の場合は、「-化」といった動作性をもつ接尾辞が付いた後、派生語となる動作性をもつ外来語語基をスコープする。これが「未-」に求められる外来語語基の特徴の一つとされることができよう。

それから、「無・非・未」と外来語語基との結合における否定接頭辞の働きに関しては、結論を言えば、従来の漢語・和語語基との結合と共通点も相違点もある、と本稿の考察を通して明らかになった。

[無・非・未+外来語語基]派生語においては、〈存在性の否定〉は「無-」により、〈概念性の否定〉は「非-」によってその機能が担われる点は従来と一致している。一方、〈事態性の否定〉は、従来の否定接頭辞と漢語・和語語基との結合では「非-」以外に「不-」「無-」もその機能を担うのに対し、外来語語基と結合する場合は「非-」によりその働きが果たされるのである。両者は少し相違を示している。

次に、〈価値性の否定〉及び〈行為性の否定〉という二つの働きについて、[無・非・未+外来語語基]派生語及び従来の[無・非・未+漢語・和語語基]派生語においては本稿の調査を通して相違点が見られた。

まず、否定漢語接頭辞が外来語語基と結合するに当たり、〈価値性の否定〉という働きを表す派生語は作り上げない、ということが挙げられる¹¹。これは、否定漢語接頭辞が和語・漢語語基と結合する

¹¹ 相原(1986)70～71頁では、否定接頭辞が従来の漢語・和語語基と結合する場合、〈価値性の否定〉は「不-」と「無-」によりその働きが果たされると論じられたが、今回の調査では、まず、外来語は「不-」に後接しないし、「無-」と外来語語基と結合する派生語や複合語は主に〈存在性の否定〉であり、〈価値性の否定〉を表す例はないのである。

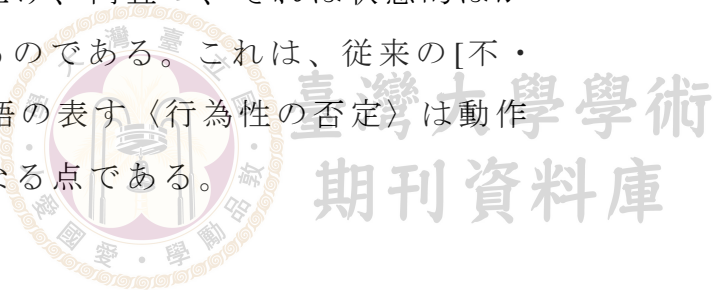
派生語には〈価値性の否定〉を表すの(ex.「不出来」「不釣り合い」「不向き」や「不機嫌」「不細工」「不成績」など)が見られる、と従来の造語現象¹²と異なる点である。

そして、〈行為性の否定〉に関しては、いわゆる〈行為性の否定〉というのは行為や動作が行われぬ、または行われていないといった意味なので、否定漢語接頭辞に後接する語基は動作性をもつことが条件なのである。従来、漢語・和語の動名詞語基と結合するに当たり、〈行為性の否定〉を表す、[不・無・非・未+漢語・和語語基]派生語はいずれも存在するが、特に「不～」派生語が多く見られるのである。この、「不-」と漢語・和語の動名詞語基が結合する派生語(ex.「不干涉」「不許可」「不参加」など)は、その語基の表す行為や動作が行われぬといった意味を示し、言わば、動作的な〈行為性の否定〉という働きだと考えられよう。

ところが、前述したが、「不-」は外来語と結合せず、即ち、「不-」によって動作的な〈行為性の否定〉が表される[不+外来語語基]派生語はないわけである。一方、「非-」は外来語語基と結合はするが、その外来語の結合相手は動名詞はなく、〈行為性の否定〉を表す例はない。なお、「未-」は動名詞の外来語語基とは結合するが、[未+外来語語基]派生語の表す〈行為性の否定〉というのは、従来の[未+漢語・和語語基]派生語(ex.「未完成」「未発表」「未公開」など)と同じく、語基の表す動作や行為がまだ実現していなく、即ち「…(し)ていない」「…なっていない」といった意味であり、言わば、状态的な〈行為性の否定〉(ex.「未チェック」「未セット」「未チャレンジ」など)だと捉えられよう。

というわけで、外来語語基が「未-」と「無-」とだけ結合して〈行為性の否定〉を表す派生語を作り上げ、尚且つ、それは状态的ばかりであり、動作的なのは欠けているのである。これは、従来の[不・無・非・未+漢語・和語語基]派生語の表す〈行為性の否定〉は動作的なものも状态的なものもある、と異なる点である。

¹² 相原(1986)71頁。



ところで、ここで上にまとめた、否定漢語接頭辞と外来語語基との結合に関する考察内容に基づき、事象における肯定否定の対立概念から、もう一度否定漢語接頭辞と従来の漢語・和語語基との結合、及び外来語語基との結合における否定概念の相違点を考えてみたい。

まず、先行の論述を見てみよう。須山(1974)には、

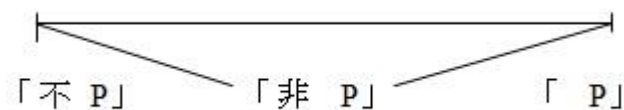
…、P という立言がまずあり、その P を否定した P ならざるもの(状態)にはさまざまな段階や状態があり得る。そして不 P はその内のひとつというよりも、もっと積極的に P の対極を示している。P と不 P はこの場合にまさにひとつの線でつながった両極になるのだが、ことばの形式に表われる面から考えれば前の二分法に対応させてこの場合を三分法によるとらえ方と考えることができる。すなわち「P」と「Pでない」と「不 P」の三つである。

と論じられている。ほかに、奥野(1985)にも、

「不」は、その結合相手が幅を許さない上限の点を表すが、「非」の結合相手は、ある基準からプラス方向への幅をもつものである。

と説明されている。つまり、須山氏の言う「Pでない」というのが、即ち奥野氏の言う、ある基準からプラス方向への幅をもつ結合相手の語基と「非-」が結合した「非 P」のことであろう¹³。

要するに、「P」と「不 P」は肯定否定における対極の概念であり、肯定否定のスケールには、



の如く、「不 P」と「 P」という対極の概念以外に、間の、幅をもつ「非 P」もある、と三つの対立概念が考えられる。例えば、「美人」に対し、「不美人」があり、その間は(「美人ととくにいうべきでは

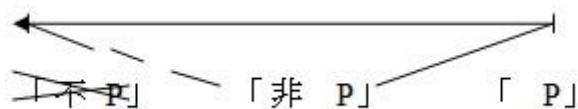
¹³ 否定肯定のスケールにおける対極の考え方は須山(1974)26頁と奥野(1985)92～93頁を参照。

ない」¹⁴という意の)「非美人」であり、即ち、

「不美人」 — 「非美人」 — 「美人」

と三者対立の概念である。ちなみに、「無 P」とは存在否定の概念なので、上記の肯定否定のスケールには出ない¹⁵。

この先行の論述に基づき、今回の[不・無・非・未+外来語語基]派生語に関する考察を通して、[不+外来語語基]という語構造の派生語は全然存在しないということからして、外来語が否定漢語接頭辞と結合するに当たり、「P」に対して、「P」の対極である「不 P」の否定概念は欠けており、次の図式のように幅をもつ「非 P」だけある。



例で説明すれば、「アイドル」に対し、その否定というのは「非アイドル」であり、「不アイドル」はなく、言わば、

~~「不アイドル」~~ — 「非アイドル」 — 「アイドル」

と二者対立の概念なのである。なお、それに存在否定の「無 P」の概念がある、と見受けられた。

これも、「不 P」「非 P」「無 P」の否定概念を全て有する、従来の[否定漢語接頭辞+漢語・和語語基]派生語と相違する点だと言えよう。

五、おわりに

以上、否定を表す漢語接頭辞「不・無・非・未」と外来語語基との結合に関して、外来語語基の品詞性、派生語における否定のスコープ、そして否定漢語接頭辞の働きという三つの観点から、従来の

¹⁴須山(1974)26頁を参照。

¹⁵「未～」は事象の未実現であり、肯定否定のスケールとは次元の異なる概念である。

[不・無・非・未＋漢語・和語語基]派生語との対比を通じて、両者の共通点や相違点、そして[不・無・非・未＋外来語語基]派生語の特徴などを論じてきた。

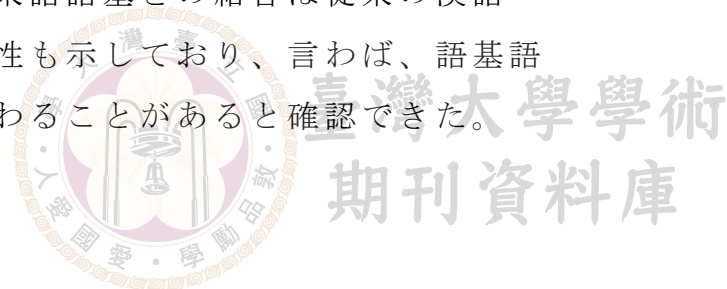
本稿の実例調査を通して、否定漢語接頭辞「不-」は外来語語基とは全然結合しないのであり、それに対し、「非-」は外来語語基とよく結合し、一番生産性をもち、他に「無-」と「未-」も外来語語基と結合はするが、さほど多くない、とわかった。接辞と結合する外来語語基の品詞性は従来の漢語・和語語基のとは大体一致しているが、中に「非-」に後接する語基では少し異なる点が見られた。否定のスコープに関しても、否定漢語接頭辞と外来語語基との結合は、従来の否定漢語接頭辞と漢語・和語語基との結合と共通している、とも明らかになった。

それから、否定漢語接頭辞の働きにおいても、外来語語基との結合及び従来の漢語・和語語基との結合における異同を解明できた。特に〈行為性の否定〉に関しては、従来の[不・無・非・未＋漢語・和語語基]派生語の表す〈行為性の否定〉は動作的なものも状態的なものもあるのに対し、[無・非・未＋外来語語基]派生語の表すのは状態的な〈行為性の否定〉のみだ、と両者の本質的な相違を指摘した。

更に、本稿の考察を通して、肯定否定の対立概念のスケールにおいては、否定漢語接頭辞が従来の漢語・和語語基との結合は「不 P」—「非 P」—「P」と三つの対立概念が存在するのに対し、外来語語基との結合は、「非 P」—「P」と二つだけである、と両者の肯定否定概念の本質的な相違点も論述した。

従来、否定漢語接頭辞について、漢語・和語と結合する派生語だけを中心にその造語性が論じられていたが、本稿の調査分析を通して、同じ接頭辞でありながら、外来語語基との結合は従来の漢語・和語語基との結合とは異なる造語性も示しており、言わば、語基語種の相違により接辞の造語性も変わることがあると確認できた。

参考文献



- 相原林司(1986)「不— 無— 非— 未—」『日本語学 特集接辞』5
—3、明治書院
- 奥野浩子(1985)「否定接頭辞『無・不・未』の用法についての一考
察」『月刊 言語』14—6、大修館書店
- サトー・アメリカ、川崎晶子、ソーニア・ロンギ(1982)「語頭の位
置にある否定的な意味をもつ造語要素『無・不・み・非』の意味
と使われ方」『日本語と日本文学』2号、筑波大学国語国文学会
- 須山名保子(1974)「接辞『不』『無』をめぐって」『学習院大学国語
国文学会誌』17号
- 野村雅昭(1973)「否定の接頭語『不・無・非・未』の用法」『国立国
語研究所論集 4 ことばの研究 第4集』国立国語研究所
- (1978)「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告 61
電子計算機による国語研究 IX』国立国語研究所
- (1981)「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』49-10、岩
波書店
- 吉村弓子(1990)「造語成分『不・無・非』」『日本語学 特集否定表
現』9—12、明治書院

